



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	利用者の主体性を促す展示に関する研究 : 都道府県立博物館の常設展示を事例として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	魏, ブン君
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16483号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94899
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wenjun_Wei_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：魏 雯君

主査 特任教授 佐々木 亨
審査委員 副査 講師 卓 彦伶
副査 准教授 今村 信隆

学位論文題目

利用者の主体性を促す展示に関する研究—都道府県立博物館の常設展示を事例として—

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の目的は、当該地域の歴史を展示テーマに持つ都道府県立博物館の常設展示において、利用者の主体性を促す展示手法の成果と課題を明らかにすることである。研究の方法として、1990年代以降に常設展示をリニューアルした12の都道府県立歴史博物館（14事例）を対象にその方針などを整理するために文献調査と博物館での聞き取り調査を行い、次にそれらの博物館が実施した来館者調査結果を基に、利用者の主体性を促す取り組みの効果と課題を博物館の視点から検討した。さらに北海道博物館（札幌市）で実施したトラッキング調査、インタビュー調査の結果を基に、利用者の観覧タイプを明らかにした。

結論として、1つめは都道府県立歴史博物館が導入した主体性を促す展示手法を、① 利用者にとって身近な展示内容の提供、② 利用者が五感を活用した体験型展示の多用、③ 利用者が選択可能な展示内容や動線、解説の提供、④ 利用者が体験学習できる常設空間の設置、⑤ 利用者が博物館職員との対話や利用者同士の対話ができる常設空間の設置、⑥ 利用者が自ら展示を開催できる空間の設置、⑦ 利用者が展示リニューアルへの意見提示が可能な仕組みの整備、以上7つの取り組みに分類できた。しかし、「選択可能な展示動線」は、リニューアル計画段階では自由的な学びを促す取り組みとして位置付けられていたにもかかわらず、リニューアル後には意図通りに利用されていないことが判明した。2つめとして、実際に北海道博物館では、「選択可能な展示動線」と利用者が博物館職員との対話や利用者同士の対話ができる常設空間である「交流ゾーン」の設置目的や利用方法を理解している者は全体の半数にとどまることが明らかになり、その要因として、博物館側の説明が不十分であることに加え、利用者が展示の利用方法を改めて学ぶ必要性に気づいていないことがわかった。3つめとして、北海道博物館の利用者には、① 情報を体系的かつ効率的に得ることを目的に博物館を利用するタイプ、② 感情的な体験を求めて博物館を利用するタイプ、③ 自分が持っている固有認知と異なる考えを知るために博物館を利用するタイプの3つの観覧タイプが存在することが判明した。

本論文の当該研究領域における研究成果は、次の3つである。

1つめは、1990年代以降、常設展示をリニューアルする博物館は多くなったが、リニューアル方針やリニューアルにおける展示内容・展示構成・展示手法の変化などその詳細は、これまで断片的

にしか公開されていなかった。申請者は12の都道府県立歴史博物館（14事例）を対象に、博物館が発行する年報や報告書、関係者が投稿した論文やレポートを渉猟し、さらにこれらの博物館を訪問して担当者から聞き取り調査を行い、まるでパズルを組み立てるようなやり方で、リニューアルの状況やその後の経過を構築していった点である。その成果として、利用者の主体性を促す展示手法の取り組みが分類できた。

2つめは、北海道博物館における常設展示利用者に対する、体系的な質的調査を実施したことである。同館ではこれまで行われたことがない調査手法であった。その成果として「選択可能な展示動線」と「交流ゾーン」の設置目的や利用方法を理解している利用者の割合とその要因、および同館に3つの観覧タイプが存在することを明らかにした。このことは、同館の今後の利用者対策、とりわけインバウンドによる利用者への案内やサービスを検討する際に、実際に活用される見込みである。

3つめは、これら2つの取り組みと成果から、展示改善に向けた2つの方策を示したことである。つまり、①利用者の資料を解釈する能力のみならず、博物館のサービスを利用するリテラシーを向上させること。②利用者の意識変化を記録し、それを博物館にフィードバックできる仕組みを整備することで、交流空間を博物館の本来的な価値を発見する場として活用できることの2点である。

・学位授与に関する委員会の所見

口頭試問において、都道府県立歴史博物館における利用者の主体性を促す展示の取り組みを7つに分類しているが文献調査結果からその分類にいたるプロセス、および北海道博物館の利用者に存在する3つの観覧タイプ抽出のプロセスが、十分に説明されていないとの指摘があった。これに対しては、審査委員が十分に納得する説明がなされた。また、展示改善に向けた方策の記述が少なかったが、これに関しても申請者から説明があった。しかし、これは研究が博物館の現場でより実践的に進むことで方向が明らかになるものであり、本論文の成果を損なうものではないと判断した。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である魏雯君氏に博士（学術）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。